

(注)文中に登場する「譜例」はweb版では省略します。

秋という季節と感傷・哀愁のような語感を結びつけるのは、私だけではないと思うのだが、涼しさが冷え込みに変遷する時節に、何となく聞きたくなる音楽がある。例えば、ピアソラの音楽を知っている人は、その退廃的なムードが「大人な秋」を醸し出していることに同意してくれるだろう(譜例1)。私がつい手を伸ばしてしまうのは、プーランクのフルートソナタである。中でも第2楽章の **Cantilena** がぴったりくる(譜例2)。

これらの音楽はゴージャスではない。思い浮かぶ光景は人通りの絶えた街路であり、その並木は落葉を迎えている。**Cantilena** を聴きながら読みたい本は、まず中原中也の詩集(911/N29/1)である。夭折した事実や、写真で見る優しく悲しげな顔立ちも手伝って、中也の詩に哀愁を感じる人は多いようだ。私が高校生の頃にも教科書に掲載されていた「一つのメルヘン」という代表作など、天才の操るキラキラした言葉が並んでいるのに、何故か寂しげでセピア色のイメージが伝わってくる不思議な作品だった。小林秀雄が[最も美しい遺品]と評したのもうなづける。

〈秋読〉にもうひとつ挙げるとすれば、平野啓一郎の『葬送』(913/H45/2-1~2)である。病弱なピアニスト兼作曲家のショパンが音楽に生き、画家のドラクロワらと親交を深め、そして死を迎えるまでを豊かな表現で描いている。平野氏は『文明の憂鬱』などで見られるように現代文明に対する鋭いまなざしを持っているが、この作品では一音楽家の人生の秋を奥底まで読み切り、自伝でも評伝でもない薫り高い小説に仕上げている。ほどよく分厚いので、秋の夜長にもぴったりではないか。

ここまでの流れにまかせて、今回の図書ニュースでは音楽と文学の間を飛び回ってみよう。

日本ではお馴染みの『仮名手本忠臣蔵』(081/I1-6/241-1)であるが、オペラになっていることは知らない人が多い。作曲は三枝成彰で、その初演を録音したCDを聴いたのだが、良質な台本に驚いた。筋書きはよく知られているとおりだから、「怨み」とか「殺す」とか物騒な言葉が頻出するし、アリア(オペラ歌手がソロやデュエットで歌う)のタイトルも「あの世でおまえを夢に見る」「泰平の世が真赤に染まる」など恐ろしげである。しかし、実際に聴いていると刺々しきはあまりなく、イタリアの伝統的なオペラと同様に登場人物の心の動きがしっかりと伝わり、時にはコミカルな雰囲気さえただよう作品だった。言葉と音楽の極めて上質な融合と言えるだろう。

一通り聴いたあとで台本の作者を調べたら、小説家の島田雅彦である。有名ドラマや映画の脚本を多数手がけている大御所かと思ったら、意外であった。北野の図書館にも島田氏の著書は何冊か有る。中でも『おことば〜戦後皇室語録』(288/S3/1)は、異色の編著で

ある。終戦の日の明仁親王(当時)の「おことば」から始まって平成17年に至るまで、皇族の方々の言葉の中に喜怒哀楽を含めた息づかいを感じ取り、昭和史の一部として編纂する。オペラ忠臣蔵で言葉と人間感情を結びつけた島田氏にこそ、似つかわしい仕事と感じられた。

日本語というのは他の言語と同様まさに生きている存在であって、使う人によって輝いたり、錆びついたり、癒したり、傷つけたりする。北野の図書館には、生きている日本語を実際に使う側の立場から考察した良著もある。北野卒業生の金水敏氏も全体編集に加わった『そうだったんだ！日本語』(810/S15/1-1~10)である。文法的な分析と違って退屈しないので、是非読んでほしい。

オペラの台本ではないが似たものとして、古代ギリシア悲劇・喜劇の作品に言及しておきたい。中でも筆頭に挙げたいのがソフォクレス『オイディプス王』(081/I1-3/345)である。北野図書館報や図書ニュースなどで何度も取り上げられた作品だが、今回も外すことができない。主人公が苛酷な運命のもと、知らないうちに父を殺し、知らないうちに母親を妻としてしまう。物語は進むにつれて緊迫度を増し、ついに主人公が罪人であることを悟り、自ら目を潰して盲目になる。実は『オイディプス王』のオペラ版もいくつか存在し、20世紀を代表する作曲家ストラヴィンスキーのものもある。しかし、犯人が露見していく独特の緊迫感是非、2000年以上前に書かれた原典戯曲版で味わって欲しい。

突然話題が変わって……。皆さんは「2001年宇宙の旅」という映画は知っているだろうか？ アーサー・C・クラーク(933/C26/1)の原作をスタンリー・キューブリック監督が映画化したもので、人が動物の骨を道具として使い始める場面や、宇宙船の人工知能コンピュータが乗組員に対して反乱を起こし生命維持装置を切ってしまうくんだりなどが交錯し、最後は生き残った主人公が「すごいもの」に変貌する。私は映画ではなく原作の方を読んだが、他のSF作品と違って、華やかさよりもミステリアスで哲学的な雰囲気印象に残った。

この映画のテーマ曲として大ヒット(少なくともクラシック界では大ヒット扱い)したのが、リヒャルト・シュトラウス作曲「ツァラトウストラはかく語りき」(譜例3)である。曲自体は同名のニーチェの著書からインスピレーションを得て作られており、プロのオーケストラでも完璧に演奏するのは難しい。ただ、冒頭の曲想はまさに宇宙的で、映画館のスクリーンの前で聴いてしまうと、映画用のサウンドトラックとして作曲されたと勘違いする人が居てもおかしくはない。実際、この曲のLPやCDのジャケットには、太陽や地球がデザインされた物も多い。ちなみに同曲の作曲年代はいつ頃だと思えるか？ 音楽がモダンに聞こえるので誤解しそうだが、実は1896年。ブラームスの存命中である。

一方、ニーチェの『ツァラトウストラはかく語りき』(908/S16/1-46)は哲学史にのこる名著だが、中身は難解である。ニーチェはこの著書の中で「神は死んだ」と主張しているが、理解を深めるためには、アリストテレス以来のヨーロッパ哲学の流れを知る必要がある。ここでは、木田元『反哲学入門』(近日中に図書館に入ります)を参考書として挙げておく。

実はもう1つ、「2001年宇宙の旅」に絡んで意外なことを知った。手塚治虫がこの映画の美術担当をオファーされていた(断ったらしいが)のである。手塚氏は北野の卒業生で、

日本を代表する漫画家であるが、こんなところで名前を発見するとは思わなかった。

ところで最近、出版各社が競うように「〇〇全集」を出している。集英社「冒険の森へ～傑作小説大全」・河出書房新社「日本文学全集」・新潮文庫「日本文学100年の名作」・集英社「コレクション～戦争と文学」などの作品集をめくっていると、「へえ、この人がこんな作品書いてたんだ」と新たな魅力を発見できる。

まずは集英社「冒険の森へ～傑作小説大全」の第5巻『**極限の彼方**』（**近日中に図書館に入ります**）で見つけた、手塚治虫の小説『妖蕈譚』。[蕈]はキノコのことで、主人公の〈私〉が山で奇怪なキノコを見つけ、いじったら臭いガスと胞子を浴びせられる。自宅に戻るとそこにもキノコが……。漫画の神様との意外な出会いは此処にもあった。

続いて集英社「コレクション～戦争と文学」の中に収められた芥川龍之介『**桃太郎**』（**918/K33/1-5**）。桃太郎の鬼退治も想像上の戦争には違いないから、このシリーズに収められたのだろう。しかし、読んでみると奇抜な発想にびっくり。桃太郎が侵略者になっている。

北野卒業生の梶井基次郎の作品が、新潮文庫「日本文学100年の名作」に入っている。『**檸檬**』（**913/S75/1**）があまりにも有名だが、今回入選したのは『**Kの昇天**』（**913/N67/1-2**）。Kの溺死を知った友人が、「彼は彼自身とその影に分裂していったのだ」と考える。そんな幻想世界を病的な感受性で描いた短編小説である。

同じ新潮文庫のコレクションに安部公房の『**公然の秘密**』（**913/N67/1-7**）も入っている。奇想天外な物語を何事もなく語ってしまう作者の特質が存分に出た作品で、泥沼から出てきた飢えた仔象がマッチ箱を食べて燃え尽きる。とんでもない話を、わずか8ページにさりりである。印象に残る安部氏の作品として『**砂の女**』（**918/S9/1-46**）も挙げておく。どんどん崩れてくる砂の穴蔵に監禁されて逃げ出そうとする男、それを阻止しようとする村人……。しかたなく、同居する女とともに毎日砂掻きに従事する男はやがて、裁判所から失踪者と判断され死亡認定を受ける。一体どこからこんな発想が出てくるのか。

一体どこからこんな発想が出てくるのか。音楽にも時々変なものがある。そういう変な曲は、単独でCD化されることはなく、当該作曲家の作品全集などで出会うことになる。

バロック時代の作曲家マレの「膀胱結石手術の風景」は文字通りの内容で、ヴィオールという古風な弦楽器が金切り声のような音楽を奏する。しかもナレーション付で、「手術台上上がるが(不安で)下りてしまう」「凄まじい痛み」とか言われると、何のためのリアルさか分からなくなってしまう。シュニトケの「きよしこの夜」も、知る人ぞ知るアンコールピース。ヴァイオリンとピアノがああ清らかな音楽を奏するが、途中から音を間違えたり(間違っただけで実際にはシュニトケの譜面通り)、強烈な不協和音が出てきたりする。最後は、ヴァイオリンの調弦をゆるめて、**おなら**の音のように終了。聴いている誰もが「きよしこの夜」だと理解はできるのだが、それでいてほぼ全員が癒されない。

真面目な場面やリラックスしたい時に聴くようなものではないが、興味のある人はCDや **You Tube** で検索してください。